



Data 2022-16

監督・脚本: 鵬飛 (ポン・フェイ)
 エグゼクティブプロデューサー: 河瀬直美、賈樟柯 (ジャ・ジャンクー)

出演: 國村隼 / ウー・イエンシュー
 / イン・ズー / 永瀬正敏 / 秋山真太郎

👁️👁️ みどころ

河瀬直美と中国の賈樟柯 (ジャ・ジャンクー) がエグゼクティブプロデューサーとなり、2009年にスタートした“今と未来、奈良と世界を繋ぐ”映画製作プロジェクト、NARATIVEが鵬飛 (ポン・フェイ) 監督を起用した日中合作映画が公開。テーマは“中国残留孤児”。タイトルからは感動のフィナーレが予想されるが、さて現実とは？

日本に帰国したまま、消息を絶った陳麗華を捜すべく、義母の陳慧明が一人で来日。奈良に住み、慧明を祖母のように慕っているシャオザー (日本名・清水初美) が麗華捜しの頼りだが、なぜ定年退職した元刑事もその協力を？

俳優はもとより、撮影スタッフも超一流。重いテーマかつ悲しい結末だが、“日中友好の絆”をしっかりと感じ取りたい。それにしても、ラストでのテレサ・テンが歌う『グッド・バイ・マイラブ』の登場にビックリ！その意図を、あなたはどうか解釈？



这是由河瀬直美和中国的贾樟柯担当制片人，从2009年开始的一个“连接现在与未来、奈良和世界”的电影制作项目。NARATIVE任命鹏飞为导演的这部中日合作电影正式公开上映。主题是“中国遗留孤儿”。标题预示着一个动人的结尾，但实际上会是这样吗？

为寻找回到日本后就失去消息的陈丽华，养母陈慧明独自来到了日本。住在奈良的、像祖母一样照顾陈慧明的小泽 (日本名字: 清水初美) 是寻找丽华的依靠，但为什么一个退休的前刑警也来提供帮助？

不仅仅演员，拍摄人员也是超一流的。虽然是一个沉重的主题和一个悲伤的结局，但也请好好感受“日中友谊的纽带”。然而，最后出现了邓丽君演唱的《Good by My Love》还是让我很惊讶！这首歌出现的意义，你会如何解释呢？

■□■日中国交正常化50周年の今、中国残留孤児をテーマに■□■

田中角栄と周恩来の握手に象徴される1972年の日中国交正常化から50年。この50年間に中国の国力（経済力、軍事力）は飛躍的に拡大し、今やかつての“東西冷戦”に代わって“米中対立”がキーワードになっている。台湾問題は今日的に大きなその一つだが、中国残留孤児問題は、日本が“あの戦争”を考えるうえでの一つの大問題。

中国残留孤児とは、第2次世界大戦後、両親と離別して中国に残された日本人孤児のことで、そのほとんどは日本が旧満州国として中国東北部を支配した時の満蒙開拓移民や軍人の子供。その数は数千~数万人も言われているが、1981年から肉親捜しが始まり、日本人の親が発見できた孤児については順次帰国が進められた。その結果、今では2400人以上が既に帰国しているが、孤児や肉親の高齢化など問題は多い。しかして、ポン・フェイ監督はなぜ、今そんなテーマで本作を？どうやって麗華を捜し出すの？

■□■おばあちゃんが養女捜しのために一人で来日！■□■

本作は、残留孤児だった養女・陳麗華を捜すため、中国黒竜江省に住む養母の陳慧明（ウー・イエンシュー）が一人で日本にやってくるから始まる。しかし、本作の主役は麗華ではなく、シャオザー（イン・ズー）。シャオザーが関西国際空港まで慧明を迎えに行ったのは、中国に住む残留孤児一世の父を持ち、日本の奈良で暮らしているシャオザーが養母代わりに幼少時の父の面倒を見てくれた慧明を祖母のように慕っていたためだ。

慧明は、成人した麗華を1994年に実の両親のいる日本に帰したが、その後、定期的に麗華からの手紙を受け取っていた。ところが、ここ数年それが途絶えているため、心配になった慧明は麗華を捜すべく、たった一人でシャオザーを頼って奈良にやってきたわけだ。しかし、その手掛かりは麗華の写真と麗華から届いた十数通の手紙だけ。そんな状態で、どうやって麗華を捜し出すの？

■□■鵬飛監督の脚本には3つの欠点か？■□■

本作のパンフレットの冒頭には、ポン・フェイ監督の Director's Message があり、そこには「日本と中国二国の間に生まれた真の家族愛をこの作品を通して描きたいです」と書かれている。本作にそれがたっぷり描かれていることは確かだが、私には本作の脚本には次の3つの欠点があると思わざるを得ない。

その第1は、「麗華の日本名すら分からない」と設定されていること。1994年に日本にいる実父母の元に戻り、以降手紙のやり取りを続けていた麗華の日本名すら分からないとは一体どういうこと？第2は、日本語を全く喋れない慧明がたった一人で日本にやってくるってどうするの？ということ。シャオザーが慧明を迎えても、麗華捜しには何の役にも立たないはず。したがって、本作にも登場する中国残留帰国者協会等を頼って調査するのがベストだと思うのだが・・・。

そして第3は、本作の主役の芯になる日本人の吉澤一雄（國村隼）が麗華捜しに参加す

る動機や理由が全然見出せないこと。居酒屋で働いているシャオザーと偶然知り合っただけの関係の吉澤はなぜ、「実は麗華に会ったことがあると思う」という嘘をついてまで、麗華捜しの旅に参加したの？娘が東京に嫁ぎ、今は奈良で一人暮らしをしている元警察官、というだけの設定では、本作の脚本は不十分なのでは・・・？

■□■バックにはNARAtiveと河瀬直美監督らの力が！■□■

ポン・フェイが本作の監督に抜擢されたのは、「なら国際映画祭」（2018年）で監督第2作品目の『ライスフラワーの香り』（17年）が観客賞に選ばれるという実績を評価されたため。そしてまた、NARAtiveのバックには、奈良を舞台に世界的に活躍する河瀬直美監督の力がある。その上、本作には、中国第五世代監督の代表とも言われるジャ・ジャンクー監督が河瀬直美監督と並んでエグゼクティブプロデューサーを務めているから、その威力は大きい。

そんな背景の下で、ポン・フェイ監督は奈良の御所に拠点を構えた上、中国から優秀な撮影スタッフを呼び、本作を演出・撮影したから、本作は全般的に素晴らしい出来になっている。また、本作で主演を務めたウー・イエンシューとイン・ズー、そして國村隼の演技力は素晴らしいし、少しだけの出番だが名優永瀬正敏の存在感も大きい。

「日中国交正常化50周年」の節目に向けて、日中友好を高める映画を作るなら、中国残留孤児問題は実にいいテーマ。さらに、奈良を舞台にそれを作るなら、河瀬直美監督とNARAtiveは心強いバックになる。それは間違いないが、さて本作の出来は？

■□■ラスト近くに見る、車中での会話は？■□■

村上春樹原作の短編『ドライブ・マイ・カー』だけでは映画化に不十分だと考え、作者の了解を得て、『シェエラザード』と『木野』を付け加えた濱口竜介監督の映画『ドライブ・マイ・カー』（21年）（『シネマ49』12頁）は、第94回アカデミー賞の作品賞、監督賞、脚本賞等4部門にノミネートされたが、これは日本初の快挙。もし、作品賞と監督賞を受賞すればすごい。同作は、“濱口メソッド”による“会話劇”が見ものだが、とりわけ『ドライブ・マイ・カー』というタイトル通り、車中での会話劇が随所でポイントになっている。

本作もそれと同じように（？）、ラスト近くで吉澤が運転する車に慧明とシャオザーを乗せて帰る途中、吉澤の携帯に入ってきた電話を巡って何とも重々しい会話劇が展開していくので、それに注目！麗華捜しの旅で何らの目ぼしい情報も得られない中での帰り道だから、車中に重い空気が漂っていたのは仕方ない。他方、今や車の運転中にかかってきた携帯の声が、車中のマイクから流れるのは常識。したがって、吉澤の携帯にかかってきた電話も、マイクを通して後部座席に座っている慧明とシャオザーに丸聞こえになっていたが、その電話は何を告げるものだったの？さらに、その直後に吉澤は「本当は麗華と会ったこ

とがない」と2人に“告白”したが、それは一体なぜ？

■□■ラストになぜこの曲が！？そのセリフに注目！■□■

私はテレサ・テンの歌が大好きで、中国語の歌詞で歌えるように勉強している。彼女には有名なたくさんのオリジナル曲があるが、それだけではなく“カバー曲”にも名曲が多い。その1つがアン・ルイスが歌って大ヒットした「グッド・バイ・マイ・ラブ」のカバー。この曲は覚えやすく歌いやすい名曲だが、そのポイントは曲の合間に流れるセリフにある。タイトルといかにもピッタリな、少し長いけれども切ないセリフは、同曲を聞いている人々を泣かせる名調子になっている。しかし、本作ラストになぜ突然この曲が鳴り響くの？

それは、麗華捜しのポイントとなる、麗華がおばあちゃんに宛てた手紙の朗読だ。ストーリー展開中には、麗華が「大好きな中国のお母さんへ、私は日本で元気に暮らしています」と書いた最後の手紙をシャオザーが日本語で朗読するシークエンスが数回登場するが、これは曲と曲の合間のセリフとして最適！ポン・フェイ監督はきっとそう考えたに違いない。なるほど、なるほど！

慧明の来日とシャオザーの協力、更には動機が少し不純かもしれない(?)吉澤の協力によっても、結局、麗華は見つからなかったばかりか、逆に悲しい結果が明らかになってしまったが、さて本作ラストに見る風景は？日中国交正常化50周年を迎えた2022年、日中関係は“不太好”。しかし、本作の主人公として登場した3人のような日中友好の絆があちこちで実現すれば・・・？

2022（令和4）年2月22日記

『日本と中国』2263 (2022年4月1日)



再会の奈良
全国映画公開中

© 2020 再会の奈良・Beijing Hengye Heidsman Pictures Co., Ltd. Nara International Film Festival, Xstream Pictures (Beijing)

脚本・監督：ポフアエロ
エグゼクティブプロデューサー：河津直美
プロデューサー：ジャンクウ
出演：岡村集、ウー・ズー、エンジュー、イン・ズー、秋山真太郎、永沼崇良
中国：又沼崇良
制作年：2020年 / 中国
日本：199分
配給：ミゼナ
フィルムズ



1972年の日中国交回復から50年。かつての東西冷戦にも似た米中対立が続く中、昨今の日中関係は「不太好」。そんな時代状況下、中国残留孤児をテーマにした日中合作映画が公開。

舞台は05年の奈良。日本に帰国したまま消息を絶った陳麗華を探すべく、養母の陳慧明と黒川は春から一人づつ米日。但し本作の主人公は麗華ではなくシャオザイ。中国に住む残留孤児二世の父親を持つ春彦で暮らす彼女は養母代わり幼少時の父の面倒を見てくれた慧明を祖母のように慕っており、日本語はバツチリだ。『再会の奈良』(又見奈良)というタイトルを見れば、ラストは慧明と麗華の感動の再会！ そう思うが、そこで突然アン・ルイスのヒット曲をテリサ・テンがカバした名曲が流れ、セリフ部分は「天なきな中国のお母さんへ 私は日本で元気に過ごしてい

テーマは中国残留孤児！麗華を探す3人の旅は？
奈良を舞台に、日中の俳優・スタツの力を大結集！

ます」と書かれた最後の手紙をシャオザイが朗読するシーンになるのでそれに注目！なぜ麗華はすぐに帰国できないの？中国残留帰国者協会に頼めば容易なのでは？慧明とシャオザイに協力するのは、警察官を定年退職し一人暮らしをしている吉澤(岡村集)。「麗華に会ったらなにも返さう」と嘘をついてまで麗華探しに奔走するのは一体なぜ？美しい奈良の風景が次々と登場する上、豪華な3人の麗華探しの旅は時にシリアスに時にユーモラスに展開していくから本作は絶妙。永沼正敏らスポット陣の存在感も抜群だ。他方、ドライマ・マイ・カールで見た瀕口流の会話劇は一つ一つに重みがあったが目ぼしい情報がなく重い空気の中で吉澤の携帯に入った情報とは？今や携帯電話がマイクから流れるのは常識だがそれならそれで対話法があるのでは？まだ、運命の彼はなままで「本当は麗華と会ったらかならぬ」と告白したの？そんな不満もあるが、ラストの奈良はしっかり味わいたい。

熱血弁護士 坂和章平

中国映画を語る(61)



坂和章平(しらかわ かずひこ) 1944年生まれ。大阪府山田市長。元大阪大学法学部。都市開発に携わる経歴を経て、手がけ、日本都市計画学会、国土川賞、国土日本建築学会「建築業功績」を受賞。「昭和的中国映画大賞(2004年)」と「2009オースチン市長賞」を受賞。新著「シリアスをはじめ映画に関する雑学多読」(公社)日中国際協会、NPO法人国際日本友好会刊行。